

[illegible][illegible]

東の海を航するに

二
部
年

社友和

奇

定并至

考

中野実

勤作也

松年

1947

方板の板

石田先生

有

中野俊三

高

秋風

他年有學必成人終又及身

孝乃病家之將心也

[illegible]

通身の力掛る

中身の事なるの爲事なるを以て

[illegible]

古
今

中林居士詩集卷之四
上元夜月記

丁巳年中秋月

此の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

大正の下、松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

松橋の文は、中世の文である。

かき松か押

一 冬月一 通もあゝあやう命達う
御成り有手名ぬるおちう
ト此後身うゝのあひる
一 鹿松々又はとてふき道大平一先
此のうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ

かき松か押
一 冬月一 通もあゝあやう命達う
御成り有手名ぬるおちう
ト此後身うゝのあひる
一 鹿松々又はとてふき道大平一先
此のうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ

かき松か押
一 冬月一 通もあゝあやう命達う
御成り有手名ぬるおちう
ト此後身うゝのあひる
一 鹿松々又はとてふき道大平一先
此のうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
うゝうゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ
あやううゝうゝうゝうゝうゝ

有る中

六日

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

六日

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

有る中

何れにても

高野山に於て

之を信ぜし

法王の御

法王の御

法王の御

三まを

正法を信ぜし法王の御

法王の御

法王の御

高野山に於て

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

法王の御

[illegible][illegible]

王仲子好也
 一
 今出之曰長也

卷之五

一、本處之修繕此項工程

中世之字尤多其板板名而人不知其

厚味松栢多而
 丁云云云云
 丁云云云云

先生之文章，乃今日之寶，所以爲天下之寶。

竹石居士のるるを此の巻にやあ、月つる帝が道にせぬ

中书吏为书札是也其后公卿

五、（イ）「あやめ」は「あざみ」と同義で、花の赤い色を指す。また、「あやめ」は「あざみ」の古語である。

唯今
竹名
山陽
之
所
謂
竹
是
否
也
竹
本
在

仕女和山名と題する俳句一首を掲げる

留唐後進
竹葉青
仙舟來夢
子

山陰王羲之草書

[illegible]

多し。此は、
山崎闇斎の
書である。

何人好古者——是作必智之也。此云

劉子玄

[illegible]

[illegible]

一 大衆信を爲したる者

山陰
 石川
 柳屋
 安西
 上田
 田中
 白井
 佐野
 長谷
 水戸
 江戶
 市川

[illegible]

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

飛石煙草 帰還後方 何処までも

[illegible]

上越教育大学附属図書館



F81192341